

監査役会通信 (No.6)

代表取締役社長

平井昭光

起業についての雑感

イノベーションが今後の日本のために、日本の競争条件を整えるために必要であることは言うまでもないであろう。そして、イノベーションを推進するためには、アカデミアの発見や技術を民間にトランスファーするための、ツールとしてのベンチャーが必要であることも言うまでもないことだと思う。これまでの歴史を振り返っても、ホンダも松下電器産業も、理研を取り巻くグループ企業もベンチャーであったし、このような例には枚挙の暇がない。

さて、そのようなベンチャーは簡単にできるのであろうか。幾多のベンチャー企業の起業に出会い、成長を見守り、更には自ら起業に携わった身として、容易であると言い切ることは若干の躊躇がある。起業そのものはたやすくできたと見える場合でも、その企業に至るまでの道程がかなり長く、かつ重要であって、登山に例えれば麓から山を登り始めて8合目くらいに来た時に初めて起業となるのではないか、と思える。

ベンチャーの基礎を形成する科学技術にしても、長い研究の歴史とたくさんの公費が費やされ、更には民間企業の研究開発を経て、ようやく起業の「種」となることは多々ある。起業に携わる経営陣にしても、いろいろな形での失敗を重ね、ベンチャー経営のポイントを掴み、様々な人脈を積み重ね、ようやく起業の準備ができる。

結局のところ、ベンチャーは、一つの私企業ではあるものの社会やサイエンスの中で生まれ、求められ、見守られて、ある時必然として、あるいは自然に生まれてくる存在ではないだろうか。そのようなベンチャーをドライブするのはファウンダー、メンバーや関係者の「想い」ではあるが、「想い」だけではできないものではない。よって、そのような社会内存在としての、「過去」や周りへの感謝を忘れず、そして、「将来」の患者さんやステークホルダーの期待に応えるために粛々と「現在」を進むことが大事であろう。Venture に ad を付けたら adventure、冒険である。でも、実はベンチャーは「冒険」ではなく、ひとつの長い「旅」なのではないか、と思う今日この頃である。

以上